

エッセイ

能登半島震災から思い出すこと、
三脇康生&井上リサ、往復書簡三 脇 康 生
(仁愛大学)井 上 リ サ
(名古屋芸術大学)

1、三脇から井上さんへ

2024年の年始に、能登半島大震災が発生しました。1月10日に仁愛大学、学部の講義、精神医学2で、ゲスト講義がありまして、東日本大震災をきっかけに震災支援を地道に行う井上さんに、お願いすることにしており、このタイミングに重なり、驚いています。ぜひ、往復書簡を行って、最低限ここで考えるべきことを、ここで考えたいと思います。よくわからないことについてはよくわからないと明言して、流言にならないようにし、トラウマやストレスを誰かが大きくしたりしないようにしたいと思います。井上さんには、東日本大震災について、支援者として、着地型観光を行うことをなさってきました。その際に、震災には「見えやすい当事者」と、「見えない当事者」がいて、院生、学部生には教育をしてきていただきました。大学院ではごく例外年度を除くと意見交換が熱心にされてきました。今回の講義も、それに触れていただけたと思いますが、まずこの当事者の差異について、この書簡でも詳述してくださいませでしょうか。また、1月10日の講義で、学生からのアンケートをしてリアクションを得ることも考えても良いかもしれませんが、心理学的分析をするための前説などが十分にできない以上、無理はしないつもり方が良いと思われます。漠然とした意見調査なら協力できるものには、講義のあと協力は頼めるかもしれません。(後日ですが、講義感想文の中に、祖父母の死亡に至る被害を報告してくれた学生がいました、これには私からは返答はあえてしていません。直接的な支援が難しいものかしさを堪える時もあると井上さんが講義の中で言われ

ていたからです。私もテスト期間の密度を受け持ち科目の中で緩和するなど間接的な支援を心がけました)。

阪神淡路大震災には、私は京都で遭遇しましたが、局地型で、なんの被害にも遭いませんでした。しかし、小さい時からよく通った町、長田などが火災で壊滅した様子を見てこれはかなり精神的に参りました。今回ですと輪島です。火災が起き、朝市や漆器の店を見て観光客としてですが良い記憶を持っているからこそ、心痛みました。もちろん東北も岩手、仙台、福島と訪問した記憶はあり、親しい人との記憶が悲しいものになりました。なにより、日常の積み重ねがあつという間に消えていくのが、戦争被災に近いのかなとも感じました。

バクーニニ主義のアナーキスト千坂恭二は、日本の戦後の戦争はないのではなく、それは震災ではないかとフェースブックに投稿していました。もちろん、もっと早く18世紀には、哲学者のカントもリスボンの大地震を大きく思考を揺さぶられました。ちなみに福井大震災は戦後すぐに起きており、福井は焼夷弾火災と震災のダブルパンチを受けた場所なのですが、講義を受けている学生に意見をアンケートしましたら、福井がダブル被災地というイメージは今まで自分は持たずにきたという返信がたくさんありました。ということで、まずは、震災当事者について、ご意見を下さい、また、震災の被災トラウマと戦争トラウマの関係、無関係についてご意見を下さい。

ところで戦争トラウマに関しては急に大々的に取り上げられたのは、ベトナム戦争アメリカ人兵士帰

還兵のトラウマをP T S Dとしたのが1番大きな動きでしたが、帰還してからのアルコール、ヘロイン、大麻などへの依存が大問題となりました。依存症については、このような物質、さらには、ギャンブルなどへの行為への依存、さらには、人への依存（昔なら、人格障害と診断されたかもしれませんが）の三領域で議論されていますが、人依存で行きますと、支援者側が依存症を出してしまうリスクもあったりしないかとも考えます。今回は、急なお願いですが、よろしくお願い申し上げます。

2、井上から三脇さんへ

震災当事者^{★注)}とは、文字通り震災で被災した人たちの事を指しているわけですが、私が被災地復興活動^{★注)}に関わる中で気が付いたのは、同じ震災当事者にも「見えやすい当事者」と「見えない当事者」が存在するという事です。「見えやすい当事者」を別の言い方に変えれば、「気づかれ易い当事者」あるいは、誰の目から見ても「明白な当事者」という事になるでしょう。彼らは黙っていても認知され易い震災当事者として、支援の手も届き易い。これは被災地にも言える事で、やはり「見えやすい被災地／見えない被災地」が存在します。被災地も震災当事者も、報道やルポルタージュによって可視化される事で、他者からも関心を持たれます。それが世の中に復興気運をもたらす場合もあるでしょう。しかしそこで見失いがちなのが「見えない当事者」の存在です。

一例をあげると、『東京新聞』（2016年10月31日付）^{★注)}の記事に、原発事故の賠償対応でうつ病になった東電社員の証言があります。東日本大震災のような広域災害は多くの被災者を産み出しますが、その中には自治体首長や市の職員、警察、消防、医療関係者、そして電力会社社員も含まれる事は珍しくありません。しかし彼らは職務上、身内の安否確認よりも先に避難誘導、救命、現場復旧の責務を負わせられる事により、彼らへのケアがどうしても後回しとなる。その中でも特に、電力会社（特に東電）や

原子力発電所で仕事をする人たちは、他の人と同じく被災者であるにもかかわらず、自らの辛さを共有するコミュニティの様なものがなかったと言えるでしょう。実際に、震災当初は匿名であっても東電社員が被災者としての辛さを発信できるような雰囲気ではありませんでした。他方で、映画『Fukushima50』（監督＝若松節朗、2020）の中でも描かれた様に彼らを気遣う福島住民がいた事も事実です。東電社員の中には東京本社から福島へと出向を命じられた人だけではなく、福島で被災した人もいます。つまり彼らも福島の被災者です。しかし、新聞記事にでもなければ彼らは存在しないも同然であり、ケアが行き届くはずもない。

以上は、「見えない当事者」自らが声を上げない事で、見え難い状況になっている例ですが、もう一つ別のパターンとして、声を上げているのにもかかわらず、存在しない当事者として扱われた人たちの存在があります。たとえば福島の地方紙『福島民友』（2014年7月2日付）^{★注)}が報道した、反原発運動に反感を持つ福島県民らがそれに相当します。この記事の中では、科学的に全く根拠のない放射能をめぐる噂、デマ、陰謀論を掲げて反原発デモをやっている首都圏の反原発活動家らが登場しますが、実は彼らが少なからずの福島県民から反発をされているという内容です。

これは、同じく『福島民友』紙面（2016年2月2日付）^{★注)}で精神科医・堀有伸が述べている事とも共通しますが、「福島県民なら原発を憎んで当然だ」という思い込みが虚構の当事者像を産み、それが結果的に福島の被災者への「当事者らしさ」の押し付けに繋がるという事です。震災直後に思い立って南相馬まで赴いた堀有伸自身、当初は「極悪非道な原子力ムラを打倒したい」という正義に駆られていた事を告白し、後になってそういう押し付けは誤りであったと述べています。この当事者への押し付け、または、当事者を主義主張や政争の具として搾取するという構図は、今般の能登半島地震でも現在進行形で起こっています。日頃から政権批判や行政批判

を繰り返している或るインフルエンサーが、自分の意見に同意しなかった能登半島地震の被災者に対し「じゃあ、ずっと（あなたは）瓦礫の下でお過ごしください」と発言し、物議を醸しています。

そして、今般の能登半島地震は三脇さんにとっても大きな心情の変化があったのではないかと思います。三脇さんは震災以前から親しみのあった《場》として輪島をあげています。ご覧のとおり、奥能登に位置する輪島は甚大な被災をしており、以前の佇まいは見る影もない。以前の景色をよく知っていた三脇さんにとっても、これは東日本大震災の時には起こらなかったある種の《喪失体験》であると私は感じました。この、特定の土地や場所をめぐる《喪失体験》は、もちろん珍しいものではなく、例えば子ども時代に毎日のように遊んでいた近所の空き地や野原が突然姿を消し、そこにマンションや高層ビルが建ったり、母校の校舎が廃校になるなどの体験は誰でもあるかと思います。子ども時代は学校や友人がコミュニティのウェイトを占めているので、これが大きな《喪失体験》となる。他方で、大人になってから起こる《喪失体験》は、やはり災害や戦争に抛るところが大きいと私は考えます。ウクライナ戦争が起こった時、ロシアから一方的に侵略を受けたウクライナの人たちが、以前は一般的にロシア語読みをしていた地名をウクライナ語の原語で名を指すようになりました。（キエフ→キーウなど）あれは、失いかけた郷土に対する強い思いがある。三脇さんが能登半島地震で体験したこともこれと共通していると思います。これはいわば、長い間、無意識のうちに郷土と一体化していた《身体》の喪失の危機でしょう。この《身体》の喪失の危機とは、東日本大震災で福島県の被災者たちが部外者から福島をカタカナ表記で《フクシマ》と言われた時、あるいは、東京で築地市場移転反対運動が起こった時、豊洲という土地はもともと穢れているから「新築地」や「築地八丁目」に地名を変えろと反対派などから言われた時の豊洲住民の心情とも共通するかもしれない。戦争、災害、そして、正義に駆られた暴力的な市民

運動によって郷土が蹂躪されてきたともいえるかもしれません。次回、これが戦争トラウマとどう繋がっていくのか、考えたいと思います。

3、三脇から井上さんへ

私の震災経験の対象には輪島というよりも、もっと深い対象がさまざまあります、例えば震災29年目を迎えた神戸の震災は私の文字通りの、故郷、子供時代週に1日塾に通った場所、を破壊されましたが、それを輪島の破壊された姿に重ねていたと考えます。やはりなんといっても自分に直接的な対象は語りにくいだけなのかなと、考えたりしました。

さて、それで言いますと、福井県の中心部は、第二次世界大戦の終戦すぐに、大震災を受けました。時代的に遠くなり、学生たちには他人事なのか、あまり切迫した話は聞きませんし、老人たちも黙して語らない。これは戦中の経験の黙秘と重なったのかもしれない。しかしこれでは、ダブルトラウマを受けた人がいて当たり前だと考えます。さらに福井県では震災で堤防が崩れて水害も発生しますから、焼夷弾、地震、水害のトリプルです。映画『I S O L A 多重人格少女』に描かれた老人は、阪神淡路大震災の神戸の避難所で、戦争トラウマ、つまり生き残る罪悪感がフラッシュバックして自殺してしまいました。

福井では、どうだったのか、記録が残っていないか、気になりました。むしろ、日本全土が、焼夷弾で焼かれていたので、他に助けを求める気持ちも出てこなかったのか、とも思います。なお福井へ宗教者の救援はあったようです。（『福井県史』通史編6。近現代二、三章、一節、三福井震災、公安条例）の箇所には「救護活動は、民間団体である県連合青年団、県連合婦人会や曹洞宗永平寺、浄土真宗東、西本願寺、YMCA、天理教などの宗教団体によっても積極的に行われた。（略）同様に県労働組合協議会や在日朝鮮人連盟も震災後まもなく救援活動を開始したが、福井軍政部は当初からこうした労働組合や左翼勢力による活動を災害後の混乱に乗じた政治的

扇動とみなし、きびしく取り締まった」★^{注)}とありますように東北でも起きたイデオロギーの輸入を伴う支援は福井でも起きた可能性はありますね。震災後の支援がイデオロギーの輸入にもなりかねないのは、最近、タラル・アサドが懸命に言う（『宗教の系譜 キリスト教とイスラム教における権力と訓練』などで）ように政教分離がそう簡単でないので、仕方ない部分もあるのかもしれません。

進駐軍の軍政部は敦賀に本部を置き、ハインランド中佐が総括報告をしています。しかし今のように災害精神科支援チームDPATが来たわけでもないので、身体や精神に特化した支援がどの程度あったのか様相が想像できません。とはいえ。そのように考えるとまだ進駐軍の軍政部（1949年7月まで存続）がある以上は、日本からの情報も多く持っており関東大震災の時の、後藤新平の内務大臣としての復興の働きを模範としているのかもしれません。当時の国鉄の一部にあたる名古屋電鉄が震災支援した記録を読んでいたら、やはり進駐軍が相当に支援に來ています。もうかなり日本全体からは撤退は始まっていたようですが、たしかに、自衛隊がないわけですから、行くとしたら進駐軍になりますね。またどうやら日本全国からも支援物資は來ています。おにぎりにビタミンBやCを混ぜるなど工夫が見られますが、これは軍隊での経験も大きいと思います。それでは井上さんが、お考えになる戦争と震災に関してお考えをお聞きかせください。

4、井上から三脇さんへ

三脇さんの中で能登の震災が、全く文脈の異なるはずの29年前の阪神淡路大震災を思い起こさせた背景について考えてみたいと思います。まず、東日本大震災の時には三脇さんからはこのようなお話しは聞きませんでした。戦後に起きた大きな災害の一つという認識であり、震災に対してどこか批評的な印象を受けました。それに対して、能登半島地震は何が違ったのか？ やはり、三脇さんの文化的個人史と関わる輪島という土地が、過去の震災トラウマを

鮮明に蘇らせたのではないかと思います。阪神淡路大震災を契機にトラウマ研究は進みましたが、わからない点もあった。たとえば東日本大震災では、震災とは直接関係のない事柄に触れても津波や地震の体験がフラッシュバックしてしまう人がいました。それに対してケアする側は、津波や地震を想起させるような会話は慎んだり、テレビや映画なども津波や地震が登場するものは公開が見送られる事もありました。また、ニュース映像を流す際も注意喚起がなされたのですが、まったく別の文脈から誘発されるトラウマについては対処できなかった。日常の些細な断片からもトラウマが誘発される。それは個人の育成歴や家族歴、風土、民俗などの文化的背景も関わってくるので、医療人類学的視点がないとこれを理解できない。おそらくこの点で困惑した臨床心理士もいたと思われます。そして震災トラウマは、必ずしも過去の災害体験だけに起因するものではなく、年代によっては戦争の記憶とも多分に結びついていると思われます。象徴的だったのは、広島に所縁があると言う被災者の中に、津波襲来後の壊滅した三陸沿岸部の様子を見て原爆投下後の広島を思い出してしまった人もいた事です。また、G7広島サミットに來たウクライナのゼレンスキー大統領は、広島の実験資料館を訪ねた際に、バフムトの惨状を思い浮かべたと述べています。このように、こういう震災や戦争の記憶は、唐突に、時には脈絡もなく横断的に結びつくものだとは私はこの時に認識しました。三脇さんがいま、終戦直後の福井の震災に強く関心を持たれた事とも共通すると思います。

もう一つ、震災トラウマで私が注目しているのは、山崎貴監督の新作ゴジラ映画『ゴジラ-1.0』の全米での大ヒットです。2月1日時点で全米での興行収入は5,600万ドル（約84億円）を超え、米国で公開された外国語映画では歴代3位（アジア映画ではポン・ジュノ監督『パラサイト』(2019)の記録を抜いて第1位）となり、アカデミー視覚効果賞を受賞しました。この物語の設定は終戦直後の武装解除された日本であり、元特攻隊員の男が主人公です。そこに

ゴジラ襲来する。戦争で日本人全員が痛めつけられた上に大災害が起こる状況は福井地震とも共通しますし、こういう悲劇のダメ押しの様な展開は、「怪獣映画」でありながらも米国人を人間ドラマへと引きずり込みました。なおかつ、戦時トラウマを抱えた主人公は、ベトナム戦争や9.11同時多発テロ★^{注)}のトラウマを抱えた米国人の姿と重なったのだと思います。他方で、『ゴジラ-1.0』は英国でもヒットしたのですが、英国人の場合には第二次世界大戦のトラウマと重なっているのではないかと私は思いました。英国では、第二次大戦後の帰還兵に対して社会復帰のためのリハビリと心理ケアを重点的にやったのですが、その拠点となったのがストック・マンデヴィル病院です。後にこの病院では負傷兵らを集めた競技会を開催するようになり、それが今日のパラリンピックの原点となっています。その年代が1948年頃であり、ちょうど『ゴジラ-1.0』の時代設定と同じなのです。だから英国人にとっては『ゴジラ-1.0』から戦争トラウマを誘発するとしても、ベトナム戦争ではなく、やはり第二次世界大戦なのではないかと私は思ったわけです。これが、先ほども述べたような歴史的、文化的な差異によるトラウマの表出でしょう。

5、三協から井上さんへ

『ゴジラ-1.0』はぜひこの機会に見たいです。(その後、私も白黒バージョンを福井のシネコンで見ましたが、モーニングショーでしたが、なんと人でいっぱいでした、年齢層は低くなかったです) 学生の中にも見た人はいたようです。トラウマと戦争の総合的な学びになったと書いている人もいました。私には実は福島には次のような思い出があります。大変に複雑な気持ちですので、なんとか誤解なく伝えたいのですが、福島県立医大での精神医学の学会後、先輩と福島の温泉に泊まりました。1999年のことだと思います。確か社会精神医学会です。学会が終わり、打ち上げで先輩と温泉街に入りましたら、早速、目に留まるものがありました。「優生保

護法」指定産婦人科医の看板があまりにそこらに目立つような気がしました。1996年にこの法律は、母体保護法に名称変更されましたから、それでも法律名が変わっていないので、記憶に強くとどまったのかもしれませんが。この時期辺り、専門学校や大学非常勤でも、公衆衛生学を教えていた時期なので余計かもしれません。この温泉街で、つまり妊娠中絶を産婦人科医にて気楽にできることがこれだけ執拗に示されているのかと思われました。もしかしたら女性を救う意味があったのかもしれませんが。おそらく80年代までくらい機能した看板でしょうから、それなら戦中、戦後復興から高度成長期に機能したのも良いところでしょう。この法律は、1948年から1996年まで施行されていました、しかし1999年当時は、もうそのような場としては、完全に鄙びており、こんなところに男二人で泊まるのかと思うと、家族用に明るい健康な雰囲気の温泉宿が開かれていました。確か一箇所だけでした。こんな家族風呂みたいなところは今はここだけですと中居さんが言われていました。あとは遊郭みたいな雰囲気がまだ残っていました。閉めているところも多かった気がします。新しく生まれかわるところだったかもしれません。このことを後に、といっても震災のかなり前ですが、福島出身の精神科医に聞きましたら「ああ、あれは原発関係者がいわゆる遊郭的に遊びに来ていた温泉です、忘年会新年会も兼ねて」と言われてしまいました。この風景がこびりついています。もちろんこれはデマかもしれませんが。「優生保護法」の看板があんなにたくさん出ているのは、正直人生ではじめてみました。福島競馬場との関係や、炭鉱労働との関係などもあるかもしれませんが、この温泉に関係したのは、原発関係者そのものだけではなくないと思います。しかし東日本大震災は東日本全体の困難なのに、どうしてもあの「優生保護法」の指定を受けていますという何箇所にもあった看板が記憶に蘇ってきます。旧法が堂々と掲げられていますが、その看板自体当時はあまり見る人すらいなかった感じでした。これは日本

の高度成長の痕跡への私の恐怖なのかもしれません。つまりかなり無理をした成長期が終わったという消耗した感じです。正力松太郎の読売新聞の船頭で始まった原子力平和利用も、井上さんが言われるような東北電力の女川発電所^{★注)}みたいな場所の高度の高さを安全に維持できたら信用できますが、私には他は本当に大丈夫なのかなという気持ちと、あの温泉にあった執拗な看板の数が、どうしても私の短絡的な直情的な記憶を作ってしまう、蘇るのであえて語るのは控えて、これは言わないでここまできたのです。

あと東北をアートで救う動きには、どうしても余りの単純さがありますね。井上さんもよく指摘されるヤノベケンジさんの放射能ゼロを目指すような作品ですね。もちろん濱口亮介さんの映画「ドライブ・マイ・カー」、あれはややケア映画のすぎますが、あの映画の監督で、彼はその前の作品の撮影のために東北に数年入っています。東北が、そこに生き残った人が、濱口を導いたのは本当のようです。また写真家の畠山直哉さんはお母様を岩手の陸前高田で失いそれからアートを考え直されてました。高知の薬工ミュージアムで障害のある方と展覧会もされました。「WARAKOH think and feel 東北 vol.2

変わったもの、変わらずにあるもの2014.2.23(日)-4.13(日) 薬工ミュージアム」「趣旨文この度、薬工ミュージアムでは、「WARAKOH think and feel 東北」シリーズの第2弾として、東北在住もしくは出身の作家7名を紹介する「変わったもの、変わらずにあるもの」展を開催いたします。2011年3月11日におこった東北地方太平洋沖地震は原発事故を伴う未曾有の大震災となり、被災地の方々を取り巻く環境や状況を劇的に変えてしまいました。今回紹介する7名の作家のうち、田崎飛鳥と水沼久直は環境や状況の変化など震災の影響により一時的に絵を描くことができなくなり、それは少なからずとも彼らの作風に変化を及ぼしましたが、彼らの「表現することへの思いは変わることなく、現在では制作を再開しています。本展では、震災前と変わらず制作を

続ける青木尊、似里力、本田太陽、現在では制作をやめてしまった武田拓の作品を併せて紹介するとともに、写真家・畠山直哉の故郷である岩手県陸前高田市の3.11以後の姿を捉えた写真60点と、それ以前の写真60点を、表裏2枚のスクリーンで同時投影します。地震発生より間もなく3年を迎えようとしている現在でも、復興どころかまだまだ復旧さえできていない地域がたくさんあります。時がたつにつれ、当時の記憶が風化しつつある今、本展を通じ、その現状を今一度考える契機となり、微力ながら復興の支援につながれば幸いです。」^{★注)} 畠山さんが、バイクに乗って、津波でどうなったか分からないお母さんを探しに行く、その当時の様子を写したDVDの制作ファウンドに私も参加しました。そんな支援は私もしました。畠山さんのような震災から自作の前提に切り込む作家はまだまだ信用できるかもしれません。この考察はようやく、この春に出る多文化間精神医学会の雑誌に書けそうです。しかし結局、被災国日本には、トラウマ・サバイバー・アートが日本の本来のアートだと批評家の榎木野衣などがい出して、困ったことだ、もっと深めて言えよと考えていたので、東北には私にはどうも距離があったのだと思います。

最近、あの夢野久作の人気が出ているという学生がいて、卒論研究をしていました。夢野久作も父が右翼というか玄洋社で、自由民権とアジア解放を求めている段階で、まだ国粋主義になっていない時期ですが、自分も軍隊経験ありで、また彼自身、禅僧を目指しうまくいかず、しかし、新聞記者として関東大震災取材したからこそ、奇書と言われる『ドグラ・マグラ』も書けたのだと思います。鶴見俊輔の解説本『夢野久作・迷宮の住人』を引きますと、彼の本名は杉山泰道、父は杉山茂丸。父は泰道に家督を譲り、玄洋社関係者でありながらさまざまな派閥にインタビューを浪人としておこなう秘密も守り全体像が見える人だったようです。今なぜ、夢野久作か。鶴見なら以下のように答える気がします。夢野も父も、軍国主義が勃興する前の1935、

1936年に、父と彼自身の順ですが次々と亡くなる、日中戦争、日米戦争を知らない。よって二人こそが、むしろ戦後の民主化が知らないことをむしろむしろ知っているかもしれない。夢野の作品では「徹底的に社会から規定されていない者」が推理の軸になる。「自分をつねに虚においてみる。名前のつく前の自分の部分から考える」(p18)そこにインターナショナリズムを考えられると鶴見はします。このような意味で震災は、夢野と父たちの、戦後民主主義以外の思考を、嫌でも思い出させてくれないか、もちろん、それはすぐに、戦中、戦後の体制に引き戻されますが。日本の震災被災は戦争産業の大勢を切り崩す部分もあるはずでしょうし、後藤新平も東京復興を予算の関係か思う通りにはいかなかったのですから。

ところで上山和樹さんはひきこもり経験当事者として『「ひきこもり」だった僕から』(講談社)(今は、むしろ「共事者」という概念の方が「当事者」よりも健全だと上山和樹さんもブログには書かれているようですが)という名作を書かれたわけですが、この上山さん、この大学にも何度も時間を使って話に来てくれました、彼も阪神淡路大震災の被災者として、そのような夢野の言うフリーなものを感じたのかもしれないかと考えたりします。

では、最後に、井上さんからアートと震災などについて伺って終わりにしたいと思います、できましたらこの続きは2024年に国際医療福祉大学で行われる多文化間精神医学会で継続議論できたらと思います。

6、井上から三脇さんへ

まず最初に、三脇さんの福島への個人的記憶について言及する必要があると思いました。福島と一口に言ってもとても広く、浜通り、中通り、会津では全く風土が異なります。三脇さんがどこの福島について語っているのか明快な手掛かりはありませんが、おそらくは、飯坂温泉か、あるいはいわき湯本あたりの事だろうと想像できます。三脇さんがそこ

を訪ねた1999年頃という、かつての「常磐ハワイアンセンター」が「スパリゾートハワイアンズ」と名称を変えて賑わいをみせた頃で、この後に「アクアマリンふくしま」などの観光施設が増えていきます。他方で、街の中には炭坑時代の歓楽街の名残りもあったのでしょうか。かつて炭鉱労働者が多くいた1950年代は朝鮮戦争特需で活況がありましたが、その後の石炭輸入自由化政策や原子力の導入によって国内石炭産業は斜陽の時代を迎えます。三脇さんの中にある福島の記憶とは、その断片が《物語》として結びついたものでしょう。

一方で、それと同時に私が感じたのは、都会の文化人・知識人階層、所謂インテリが東北に抱く《寒村幻想》のようなものです。それで思い出したのが、高村光太郎の『三陸廻り』^{★注)}という随筆です。この中で光太郎は、昭和初期に女川を訪ねた時の事を綴っています。光太郎は、自分の目から見て貧しくて寂れた漁村に映った女川で、漁船に乗ったり宴会に飛び入り参加をするなどの体験観光を試みるのですが、光太郎が何者かを知らない女川の漁師からは相手にされない。この時に光太郎は「こんなインテリが道楽半分に漁夫の足手纏いになり、無責任な所謂経験をする事に何の意味があろう。」と反省し、さらに「見学や経験や真似や同感はいずれも当事者への冒涇だ。」とも述べ、そこで生業を営む女川の漁民に対する尊厳が欠けていた事を「恥だ」とさえ言っています。こうして女川の旅の中で自己嫌悪に至った光太郎の中にあったのは、まさしくオリエンタリズムやコロニアリズムでしょう。三脇さんの言う《高度成長の痕跡への私の恐怖》という福島への眼差しも、光太郎が後から抱いたような、この《後ろめたさ》が根底にあるのではないかと思います。都会の人間(特にインテリ)が地方の集落に抱く《後ろめたさ》は、時に屈折したかたちで原子力立地にもぶつけられます。これが、所謂「反原発」の言説にしばしば現れる「札東で(地元民)の頬を叩いて」という表現です。一見すると、「原子力政策に搾取された」地元民の味方となり、地元民に寄り添っている様に

見えますが、必ずしもそうではない事は前出の『福島民友』の記事でも触れたとおりです。福島に限らず、もちろん福井の若狭でも、「札東で頬を叩いて」というお決まりの表現に不快感を示す人たちは少なからず存在します。震災とアートを考える時も、この搾取の構図は無視できません。

東日本大震災以降、実に多くの《震災アート》が出現しましたが、美術批評誌や東京のマスメディアはそれをアートの成功例や美談として称揚するだけで、当事者から上がった反発の声は黙殺したと言っていいでしょう。だから、たとえば『美術手帖』だけを読んでいる東京のアート関係者や学生らは、ヤノベケンジ作『サンチャイルド』が少なからずの福島の住民から反発を受けて撤去された事や、その他の多くの《震災アート》が復興どころか、復興や日常への回復の足を引っ張った事も知らないわけです。アートにおいて当事者（この場合は被災者）が他者から搾取される構造にはいくつかあって、その一つがアートがまったく役に立たない事に対する《後ろめたさ》に起因する当事者の美化、聖人化ですね。これは当事者に対しても《当事者らしさ》を求める事にも繋がり、支配の力学が生まれます。また他方で、まったく役に立たない無力なアートがたとえば「震災」「原発事故」といった主題性に依存する事で生まれる当事者の搾取もあります。現代アートがアートの文脈の外、つまりは「社会」と積極的に関わろうとした時、その「社会」の中に存在する当事者がアート作品の主題として記号化されたり、当事者が市民生活を営む「場」や「空間」が、表現する側のための《舞台》になってしまう例はすでに1990年代あたりから顕著にありました。たとえばエイズ、ジェンダー、戦争、ウイルス、環境問題などが現代アートの恰好の題材となってきたわけですが、コンセプトの中で体裁良くシミュレーションされた空間に、果たして当事者の存在は見い出せたのか、いま一度考えてみるべきでしょう。このアートゲームの延長線上にトラウマ・サバイバー・アートも含めた《震災アート》が存在すると私は考えています。

そして《震災アート》は、時として当事者間での分断も生んでしまうという深刻さも孕んでいます。わかりやすい事例としては、やはりヤノベケンジ作の『サンチャイルド』でしょう。この作品が福島市の震災モニュメントとして設置されるとなった時、少なからずの住民から「反対」の声が上がったわけですが、あの一件以降、地元住民の中には『サンチャイルド』を正式名称では言わずに「黄色いアレ」「黄色いやつ」「黄色いの」と呼ぶ人が出てきました。当然、美術関係者や美術ファンからはこの呼び名は支持されないわけです。しかし意外だったのは、『サンチャイルド』事件以前までは福島応援に前向きだった他の地域での震災経験者（宮城県の津波被災者や北海道胆振東部地震の経験者など）の中からもアート系の人たちを中心に「作品の正式名称を言わないのは作者や作品に対する侮辱だ」「作品がかわいそうだ」という声があった事です。

ここでもし、震災や戦争トラウマがいかに深刻なもので、尚且つ後世にわたって大きな禍根を残すものであるかを多くの人が理解できていれば、福島の住民らが言う「黄色いアレ」などの表現は、その名（つまりは『サンチャイルド』）を呼ぶ事によって引き起こされるトラウマの記憶を封印、回避するための装置であった事に気づくと思います。しかし実際には、原子力災害は起きなかった他の地域での震災経験者にはなかなかこれが理解されなかったという事でしょう。ちなみに私自身、アートの文脈でアート関係者に向けて『サンチャイルド』を批評する際はもちろん正式名称で呼びますが、他方で、福島の住民らと個人的に会話する時には彼らに倣って「黄色いアレ」と今でも呼んでいます。なぜなら『サンチャイルド』は、震災トラウマを抱えた福島の住民の中ではその名を呼んではいけない《忌み言葉》となったと思うからです。

7、三脇から井上さんへ

その温泉出身の祖母を持つ友人によると、そこは東日本大震災の時は、自衛隊の宿泊所として機能した

ようです。震災により、何事か新たなものが発生しますが、そう簡単には変わらないものもあると思います。さまざまな立場から、慎重に見ていかないと、当事者にも迷惑をかけることになります。と言うのも、高村光太郎の妻の主治医の精神科医、齊藤玉男の研究を私は行いましたから、その際に光太郎の弱さ、東北を巡っても分かることはある意味しれているという去勢性がない弱さ、それが妻をかなり発病に追いやるリスクもあったというような真剣な考察★^注）をしましたから次のように言わせていただけたと思います。

また、私の曾祖父は当時の兵庫県揖保郡大津村のあたりの小学校の校長か何かで、若い人のために自宅の田んぼを供出し、工場を熱心に誘致した一人だったと祖母から聞いていましたが、私が小学校に行く時は工場排水による公害問題が大きく取り上げられ、批判し当選した市会議員が大きな注目を浴びていました。私とすれば公害はもちろん反対です。あの親らからの話に聞く清流を取り戻したいですが、自分の家の田んぼを供出している、それもみんなのために、という気持ちも拭えませんでした。市会議員の力で、もちろん、川の汚さは少しはマシにはなりました。どう考えるのか、悩ましいわけです。このくらいのことが理解できれば、誰でも複雑系で思考できないでしょうか。公害を大見得切って叩けなかった、ですからこそ、この問題は、慎重に議論して行きたいと真剣に考えるものです。同時に、考えるだけでなく、能登にも、井上さんも言われるような観光など、まずはできる支援を始めたいと思います。

最後に、付け加えてですが、先日、2/16（金）京都のギャラリーヒルゲート主催「ヒルゲート夜話市民講座」に北川フラムさんが登壇したのを見てきて、北川さんとも少し意見を交換しました。北川さんは「奥能登国際芸術祭」（2017、2021、2023）で総合ディレクターをつとめ方で、現地の様子が、詳しく報告されました。既に過去の回に展示が済んで残っている作品は相当ダメージを受けているものもあり

ます。原型を留めているものもないわけではないですが。今までの地域おこし祭りの様子とは著るしく変化し、厳しい状況でした。このダメージそのものを観光の資源にするくらいの気持ちでやるしかないのかなと思いました。北川さんにはそんな気持ちがありそうでした。

【文末注釈】 井上担当部分

★注）震災当事者＝ここで言う震災当事者とは、東北地方を中心に12都道府県で2万2,318名の死者・行方不明者が発生した2011年3月11日の東日本大震災の被災者を指す。

★注）被災地復興活動＝井上は、東日本大震災の直後から福島県沿岸部および宮城県女川町を中心に、団体や組織ではなく個人で復興観光ツアーの企画・催行、ワークショップを続けている。また、東日本大震災以降、原子力発電所が停止した事により疲弊した電源立地を「準震災影響地区」と定義し、電源立地での観光支援、視察ツアー、地元人材育成などの支援活動も地元企業や学術研究機関の協力で同時に行なっている。

★注）『東京新聞』（2016年10月31日付）＝『東京新聞』（2016年10月31日付）「原発賠償『とにかく謝れ』激務で睡眠不足うつ病に 東電社員が体験証言」より。

★注）『福島民友』（2014年7月2日付）＝『福島民友』（2014年7月2日付）特集記事【復興災害「復興」の影】（4）「反原発デモに違和感や反感『福島差別』を助長した側面」より。

『福島民友』紙面（2016年2月2日付）＝『福島民友』（2016年2月2日付）特集記事【復興の道標】「悩ます『意識高い系』『押し付け』に困惑」より。

★注）9.11同時多発テロ＝2001年9月11日にイスラム過激派テロ組織アルカイダによって行われたアメリカ合衆国に対する4つのテロ攻撃。一連の攻撃で、日本人24人を含む2,977人が死亡。

★注）高村光太郎の『三陸廻り』＝高村光太郎が昭

和6（1931年）年に『時事新報』社の依頼で連載した紀行文。現在は二玄社刊『光太郎 智恵子うつくしきもの「三陸廻り」から「みちのく便り」まで』に収録されている。

【文末注釈】三協担当部分

★注）東北電力の女川発電所＝女川原子力発電所の設計思想を構築した東北出身の土木技術者・平井弥之助は、生まれ故郷の千貫神社（岩沼）に伝わる慶長津波（1611年）の伝承や、平安時代の古文書『日本三代実録』に記された貞観津波（869年）の記録、更には地元塚浜集落の大津波についての口述伝承も参考にして大津波からの防御に特化した原子炉施設の建造を提言。その結果、女川原子力発電所は東日本大震災においても過酷事故を起こす事なく、その後数か月間、地元女川町民のための避難所となった。

★注）<https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/fukui/07/kenshi/T6/T6-3-01-01-03-03.htm>

★注）<https://hajimari-archives.com/archives/exhibitions/warakoh-think-and-feel-tohoku2>

★注）三協康生「「治す」という概念の考古学-近代日本の精神医学」in川田 都樹子（著）、西 欣也（著）アートセラピー再考 芸術学と臨床の現場から（甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知14）、平凡社、2013

（補足のコメント、三協から井上さんへ）

ところでまたまた余談かもしれませんが付け足します。どうも「風花随筆文学賞」（同実行委員会主催、福井新聞社、福井仁愛学園共催、げんでんふれあい福井財団特別協賛）の方は、今も健在で、しかし共催校の生徒や学生が受賞することには、議論はどうなっているのか、どうやらシビアな議論はないようにも見えてしまうのですが、特別協賛している組織に「げんでん」というひらがなを見逃すわけには行きません。関西の友人に聞いたら「げんでん」を知りませんでした。

これは、日本原子力発電株式会社ですね。

「当社は、1957年の設立以降、わが国初の商業用原子力発電所である東海発電所をはじめとして、東海第二発電所および敦賀発電所1号機、2号機の建設・運転を通じて、原子力発電のパイオニアとして常に原子力発電の発展に貢献してまいりました。

近年、異常気象による甚大な災害が相次ぎ、地球温暖化への危機感が高まっております。また、電力需給の逼迫やエネルギー価格の高騰が生じるなど、エネルギーの安定供給確保の重要性が再認識されている状況にあります。

国内では、グリーントランスフォーメーションの実現に向けた基本方針において、原子力発電は、再生可能エネルギーと共にエネルギー安全保障に寄与し、脱炭素効果の高い電源として最大限活用するとされ、2030年度の電源構成に占める原子力比率20～22%の確実な達成、次世代革新炉の開発・建設への取り組み、既存の原子力発電所の運転延長などが盛り込まれております。

当社は、このような状況変化も踏まえ、自ら将来を切り拓く心構えで、東海第二発電所の安全性向上対策工事や敦賀発電所2号機の安全審査対応、敦賀発電所3,4号機具体化への取り組み、東海発電所および敦賀発電所1号機の廃止措置推進などに全力で取り組むとともに、これからの原子力における諸課題の解決やイノベーションに向けた取り組みに先進的に挑戦してまいります。

当社の事業運営においては、地域の皆さまのご理解が不可欠であり、今後も透明性の高い発電所運営に徹するとともに対話活動などを丁寧に進め、地域に根を張った事業者として、その役割を果たしてまいります。

今後とも、皆さまのご理解、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。取締役社長 村松 衛」。^{★注)}

以上の会社ですね。だから悪いわけではないですが、ひらがな「げんでん」にしないといけない意味は何なのか考えたくもなります。

また一方で、福井県坂井市に丸岡町が合併さ

れたときに、以下のようなことも起きています。「1948（昭和23）年6月、福井大震災により、一本田の生家が倒壊した中野重治を記念した「平成3年（1991）・第1回中野重治記念文学奨励賞「全国高校生詩のコンクール」の募集を開始する。（平成6年より丸岡町文化振興事業団へ事業を移管する。平成17年度（第14回）をもって終了。）」★^{注1}いわゆる経費削減のためもあるのでしょうか。しかし、とにかく廃止されています。中野重治は、有名な共産党員だったですね。市町村合併という自然が、きな臭く使われていないのでしょうか？日本の自然、丸山真男の批判したいわゆる日本の基底にある、「つぎつぎになりゆくいきほひ」の利用、このような問題も、震災という深刻な問題があった時にこそ、逆に隠さずに全てを照らし出す国になるべきだと思います、ここに明記をしておきます。

ところが四国新聞には次のような記事★^{注2}があります。しかしならなんで今まで中野重治の名前をつけたコンクールを行ってきたのか。奇妙奇天烈です。大義名分作りではないのかと疑えてきます。

「詩の甲子園」廃止決まる／中野重治の文学賞、遺書で2006/08/23 20:37

「プロレタリア文学と戦後民主主義文学の代表的作家で、福井県出身の中野重治を記念した全国の高校生を対象にした詩のコンクール「中野重治記念文学奨励賞」が、本人の遺言を理由に2006年度から廃止されることが23日までに決まった。

これまでに約4万8000人の高校生から約6万8000編の応募があり、「詩の甲子園」とも呼ばれていた。主催者の丸岡町文化振興事業団（同県坂井市・旧丸岡町）は遺族の了承を得ており、近く関係者に通知する。

同事業団によると、重治は「中野重治の名を冠する文学賞、記念碑をつくってはならぬ」と遺書に記していた」。

しかし以下を忘れてはいけません。坂井市は、平成18年3月20日に坂井郡の三国町、丸岡町、春江町、坂井町の4町が合併し、人口規模で福井県

下第2位の市として誕生しました。」★^{注3}元々、坂井郡の4町が合併したのに、坂井市になると丸岡町の中野重治の詩のコンクールを潰すわけです。潰れるのが自然のように。今まで丸岡が維持してきたような愛着を坂井市の他の町が持つことはないからでしょうか、この時から、今まで中野の名前を、中野の意向を無視して、広報のためにも使ってきた理由が、急に記憶にございませんとするわけでしょうか。丸岡の平成の大合併、これは2006年です、丸岡のこの「2006年問題」、これを偶然とはとても呼べないでしょう。

また、福井県で生まれ青森に移動され、自分が頑張りすぎて鬱になり、沖縄で乗り越えて、遅発性のPTSD、つまり沖縄戦の心的トラウマを発見治療されたことで有名な蟻塚亮二先生ですが、今では福島で被災トラウマを支援する精神科医の蟻塚亮二先生に、上記の状況について、聞きましたら、ご意見は以下でした。中野重治の「雨の品川駅」が好きです。丸岡の記念館には行きました。共産党側では、中野重治は遠い過去の人に扱われていると思います。というお答えでした。いやまさに、戦時中、牢獄で、共産主義からの転向を余儀なくされて中野重治が書いた『汽車の罐焚き』（角川文庫）の労働者の姿を、被災を回復する人に重ねて良いかもしれません。北陸での機関車での労働の様子が『汽車の罐焚き』では描かれています。しかし、それにしても、だからこそ、中野に関わるコンクールが、自然に、消えた、消したのではなくですね、これが日本の自然です。福井県でそんなことが起きているわけです。隠さなくて論じていきたいと思いますね。

また、中野重治は、その後、共産党に復帰して除名された歴史もあります。当時の共産党を批判しています。

☆中野重治、神山茂夫編著『日本共産党批判』三一書房（1969年）

さらに共産党からの、中野重治への反批判もありました。次の本です。

☆日本共産党中央委員会『中野重治批判—変節者の

共産党攻撃にたいして』日本共産党中央委員会
出版局(1974年)

このような歴史はいずれにしろ忘れられてはならないでしょう。もしもこのまま静かにするなら、福井県民は論争を消したがる気質があるとなる気がしますし、これには警戒してほしいと強く思います。私も、福井に一応は住んでみて、記憶喪失の得意な日本だからこそ、今の「新幹線敦賀に来る」だけでは勿体無い、中野重治という資料が福井県、坂井市、丸岡町にはあるのだと、福井推ししたいと思います。最後に、井上リサさんにも勧められて、デマでないことを確認するために、3月1日に坂井市図書館に電話し話ができて、やはり合併による各町の痛み分けの部分は大きいから、とのお答えでした。今後はできましたら、「新幹線敦賀開業、中野重治を知ろう、精神科医が語る」というような形ででも、迷惑でないなら、能登から来てくれる人がいたりして、被災地の間接的支援にでもなれたらと、いや福井にはこれが震災の歴史的支援になるのかもしれませんが、中野重治への敬意により、坂井市図書館には三脇さんから、機会の設定を可能ならと名乗り出たところです。しかしそう簡単ではなさそうでした。こんな試みが簡単に通らないのが復興をとげた日常で、被災地は結構そのようなガードがはずれているのでしょうか。中野重治は、関東大震災で金沢に戻った室生犀星を旧制第四高時代に親しく師事しました。さらに家は、一本田の生家は、福井震災で倒壊させられているのですから。

時代と深く関わり、懸命に生きた中野重治の仕事を、批判も含めて、正々堂々振り返ること、隠さないうで、それがどんどん行われること、それが震災のことを考える近道にはなると思うのです。自陣への誘導だとか、いろいろあるとは思いますが、それがどうか言う前に、まずは情報がなさすぎます。消されている。でも本当は、中野重治を弔う祭りは残っており。中野重治はこの街から消えていないと思うのです。福井の放送局の関係者とも話しましたが、そういえば、自分も中野重治を知らない、あま

りにも無知です、とのお言葉もありましたから。

(井上から三脇さんの補足へ)

東日本大震災や能登半島地震の当事者ではない三脇さんが、かつて多少なりとも関わりのあった土地の断片を遡っていく中で、最終的に《中野重治はこの街から消えていない》という言葉に帰結したのは大変に興味深いと思いました。この対話の序盤の方で私は三脇さんからの返信に宛てて、過去の戦争や震災にともなう《喪失体験》について言及しましたが、その文脈と繋がるように思います。

大きな出来事を契機にその土地が注目される事で、今まで眠っていた土地の記憶が掘り起こされるといふ事は東日本大震災でも多くの事例がありました。例をあげると、かつて福島原地元紙『福島民報』の論説委員も務めた郡山の詩人・三谷晃一の親族だといふ或る方から私宛に「郡山に三谷がいた事を忘れないで欲しい。三谷の事をもっと多くの人に知って欲しい」と、三谷晃一の貴重な資料とともに手紙を受け取りました。それ以後、福島復興ツアーには中通りに多く残る三谷晃一の詩碑もツアールートに入れるようにしたという経緯があります。また別の被災者の方からは、町村合併により喪失した古い地名の情報が私の元に多く届きました。その中には過去の水害を表わす地名もあり、貴重な災害伝承が埋もれていた事も知りました。このような記憶の掘り起こしは、三脇さんの《中野重治はこの街から消えていない》という言葉とも繋がりますね。

ちなみに、町村合併で喪失したと言われる文化事業は全国で多々ありますが、必ずしも予算削減だけが理由ではなく、人口減少や少子高齢化による文化の担い手不足という側面もあります。これに関しては一昨年(2022年)、三脇さんもパネラーとして関連イベントに登壇された『縮小社会のエビデンスとメッセージ』展(京都国際マンガミュージアム)の掲げるテーマとも共通するものがあります。末端の文化の担い手やインフラまで失われていく「縮小社会」をわれわれはこのまま受け入れるのか、否か、

です。この「縮小社会」に対して、郷土の記憶をいかに継承するかも今後のテーマとなってくでしょう。例えば、近江高島にはアドベリーという東京の人間にとっては大変に珍しいフルーツをデザートで出す温泉旅館があり、その女将さんの話では、アドベリーというフルーツは安曇川で栽培されているもので、町村合併で安曇川町が無くなる時に町の名前を残すためにこの名が付いたとのこと。また、高級メロンの産地として有名な静岡県の御前崎では、メロン農地が広がる浜岡地区の農家や旧浜岡町の地元住民の中には今でもそのメロンを浜岡メロンと呼ぶ人もいます。浜岡砂丘や浜岡原子力発電所でも有名な浜岡町も御前崎との町村合併で消失した自治体の一つですが、「浜岡」という地名に誇りを持っている人達は少なからずいて、私は浜岡の住民の方々と浜岡の歴史と産業をめぐる着地型観光ツアーも過去に催行しています。

また、震災前の郷土の記憶を辿る事に関して言えば、能登半島地震を契機に福井県高浜町と石川県志賀町の深い繋がりがもっと注目される事で、北陸の周遊観光が活発になる事を私は期待しています。高浜町と志賀町は、ともに原子力発電所が立地する事で共通する部分がありますが、実はそれ以前から深い縁があります。かつて安土桃山時代から江戸初期にかけて重税に苦しんでいた高浜の漁民たちが新天地を求めて漁村を脱出し、やがて能登半島に流れ着いた高浜の漁民たちがそこで新たな「高浜村」を興したという歴史があります。それが現在の石川県志賀町南部です。志賀町の中に残る高浜という地名は福井県高浜町が由来であり、震災以前から両町は観光交流も重ねていました。能登半島地震でも高浜町はいち早く志賀町に支援物資を送っています。

最後にひとつ、三協さんも含めて今後何らかの私たちで被災地復興に関わろうと思っている学生、芸術家、研究者や知識人らに申し上げたい事があります。それは、自分らが「復興支援」の名のもとに活動を進める上で、常に立ち止まって考える事です。

三協さんが今回構想に至ったという『新幹線敦賀

開業、中野重治を知ろう、精神科医が語る』というイベントも含め、自分らが「復興支援」と称しているものは本当に「復興支援」となっているのか。それは「誰のための（何のための）」支援なのか。もしや「自分のため」あるいは「自分が主役」になってはいないか？ 震災を自らの表現活動や承認欲求を満たすための《晴れ舞台》として利用してはいないか？ 自説の正しさを主張するために当事者の言葉を都合よく利用してはいないか？ 常にこういう予断を持って行動される事を私は望みます。なぜならば、当事者はいかなる場合でも他者から搾取されてはならないからです。

(三協から井上さんの補足コメントへ)

井上さんの言うように私欲に満ちて支援をするのか、私欲なしに支援をするのかという問題は、大変に重要ですが、難問ですね。福井震災の支援に來た宗派も、宗門を増やす欲望がなかったのかという話になります。私欲とは何か？ 搾取とは何か？ もう議論なしには済ませられません。よくない他者を指摘するのは余りに容易ですが。

ジャック・ラカンとは、日本語には漢字があるから、日本語の象徴界にはアルファベットのシニフィエ性が大きすぎるので、精神分析不可能と言ったようですが、むしろここでの議論からして、震災国だから精神分析は必須であると切り返していくこの秋の、第31回多文化精神医学会にしたいですね。精神分析を震災国の日本に是非となりますね。ちなみにフロイトの髭面を見て拒否反応を起こす認知行動療法の専門家などがいたりしますがそんな人は支援にはいくべきではないですね。精神分析と震災、まさに堀有伸先生の動きと著作に議論が集約してきました。

(三協による補足コメントの文末注)

★注) 日本原子力発電株式会社

<https://www.japc.co.jp/company/greeting.html>

★注) 坂井市立図書館<https://lib.city.sakai.fukui.jp/bunko/nakano/ayumi/nakanonenpu/>

★注) [https://www.city.fukui-sakai.lg.jp/somu/
documents/00-1.pdf](https://www.city.fukui-sakai.lg.jp/somu/documents/00-1.pdf)

★注) [http://www.shikoku-np.co.jp/national/life_
topic/20060823000246](http://www.shikoku-np.co.jp/national/life_topic/20060823000246)